学齢超過者の義務教育就学が始まって２年目

宮城県では昨年度から学齢超過者の就学が始まり、先日「宮城県学齢超過就学者の教育を語る会」で、実施の支援学校４校の事例発表と、パネルジスカッションがあった。

この問題については、当 HP に「過齢未就学児・者の就学の道が拓けそう①～③」を掲載したことがある（①：HP「雑学 BN」の福祉・教育・医療関係（Ⅳ）、2008.05.11.　②：（Ⅴ）、2009.08.04.　③：2010.06.07.）。

県内の該当者は３８名で、重症児（者）施設の該当者を対象とする３校が各３名ずつ、在宅の該当者１名の１校、計４校が昨年から実施し、その報告を兼ねた「語る会」であった。

実施２年目の今年は１９名（在宅者１名を含む）が就学しているが、事例報告では、学齢超過就学者だけに担任教師より生徒は年上であり、中には７０才代の生徒も。

各事例報告共、生徒の笑顔の様子が報告され、生徒たちは担任教師との係わりや他の生徒との交流を楽しみにしてることが伺われた。

ただちょっと残念だったのは、「こんなこともしてます、あんなこともしています」と、生徒の様子は報告されていたが、教育者として何を想い、何を願い、どう具体的に係わろうとしてるのか、プロとしての専門性からの説明がなく、また、実施してみての問題点や今後への提言等が報告の中で殆どなく、施設の療育スタッフの報告と殆ど同じ印象で、物足りなかった。

外見的に同じことをしているとしても、やはり、教育者としてのその背景となっている考え方が聞きたかった。

各校とも小学６年生に編入入学し、小卒の翌年は中学３年に編入進学し、実質２年の義務教育実施に過ぎず、「教育界は形骸的に実践しているだけ」との厳しい意見も耳にしているだけに、まず担任教師が教育者としての理論武装して、重症者の教育活動とは何かをぜひ発信して貰いたい。

学齢超過就学予定者のある親から「義務教育を受けさせることが出来そうで、ようやく肩の荷が降ろせそう」と聞いたことがあるが、中卒後高等部進学への微かな可能性もあるだけに、学齢超過就学者や親の気持ちに寄り添い、学齢超過就学問題にこれからも真摯に取り組み、「年齢に関係なく生徒にとっての教育とは何か、教育界はどうあるべきか」を悩み続ける教師であって欲しいと切に願う。

それにしても就学を行政に要望しただけでなく、実施実態を検証する機会を設けた「親の会」の企画力に敬服する。

阿部幸泰　　（2012 年 8 月 8 日　記）